

津川断層が東西に延びています。断層の上盤側には、日の岬から連なる白馬山脈が形成されていますが、南側の日高川河口部は沈降域にあたり、煙樹が浜が形成されています。

### 海岸の地形

このように、紀ノ川や日高川の沖積平野を除くと、平野といえる地形が少なく、しかも山が海岸にまで迫り、岩石海岸が多くみられるのが紀伊半島の地形の特徴です。日高川以南には、海岸を縁取るように海岸段丘が発達し、南端部の潮岬に向かって、段丘面高度が増えています。同様に広い波食台の発達が目高川以南には見られるのに対し、由良付近を境にその以北には、わずかな波食台を伴うリアス式海岸が発達します。

また大峰山脈は、ほぼ南北の山列をもちますが、主稜線はS字状に緩く屈曲しながら、その延長部が枯木灘で紀伊水道に向かって没しています。南海トラフに沿って発生する巨大地震の際に、紀伊半島南端部が隆起し、田辺付近は沈降域になります。一方、東南海道地震のときには新宮付近が沈降域になる地殻変動が見られます。

田辺 - 熊野市付近で紀伊半島がくびれたようになっているのは、これらの地殻変動の累積の結果であると考えられます。

### 紀伊沖の海底地形

大陸棚は、海水面変動の影響を強く受けて形成された地形です。氷河性海水面変動において、最終氷期の最低海水準の深度については80m～140mまでの様々な値が提唱されていますが、約1万年前には海面は-40m付近に達していて、すでに海域は現在の内湾域にまで拡大していた点では一致しています。その後、急速な海面上昇による海進(縄文海進)は6,000～5,000年前まで続き、弥生中期に2～3m前後の海面低下があり、その後の海面再上昇を記録しながら相対的に安定した海面を保持していることが明らかにされています(米倉, 1990. 大嶋, 1992ほか)。

図1・2は、紀伊沖の海底地形図です。大陸棚の縁は、紀伊水道では深さ約140m程度に

ありますが、熊野灘では大陸棚はほとんど発達していません。

大陸棚の沖合は急こう配の大陸斜面となり、前弧海盆、さらに外縁隆起帯が認められます。この部分から南海トラフとの間には多くの活断層があり、南海地震や東南海道地震などしばしばマグニチュード8規模の巨大地震を発生させています。

上部大陸斜面域には、前弧海盆である熊野舟状海盆、室戸舟状海盆が形成されています。室戸舟状海盆には水深1000～1500m、熊野舟状海盆には水深2000mの平坦面が発達していて、砂泥互層、砂、泥で埋積されています。室戸舟状海盆の南側に土佐磐があります。熊野海盆には中央部に隆起帯があって、海盆を南北に二分しています。

室戸舟状海盆には大陸斜面に刻まれた海底谷がつながっていて、堆積物重力流による、深海底への陸源碎屑性堆積物の供給路として重要なたらしきをしています。熊野灘には、尾鷲海底谷、太地海底谷など多数の海底谷が発達しています。

一方、紀伊水道においては、四国の蒲生田崎と日の岬を結ぶ隆起帯を境に海底地形が異なります。北部は水深100m程度の陸棚になっていますが、南部には室戸舟状海盆が広がっています。最終氷期の海水面低下期には、紀伊水道の中央部で紀ノ川と吉野川が合流し、古大阪川となって南流し紀伊海底谷につながっていたと推定されています。

また日高海底谷、富田海底谷があって、それぞれ日高川、富田川につながっています。これらの海底谷は、潮岬深海チャネル(嶋村, 1994)を経て潮岬海底谷につながり、さらに潮岬海底谷は、潮岬沖で外縁隆起帯を横切って南海トラフ(舟状海盆)に流れ込んでいます。海底谷は、陸源碎屑物の海域における到達範囲と分布を規制しています。

